



【巻頭言】

「エレクトロニクスソサイエティの新たな組織形態を目指して」 エレクトロニクスソサイエティ 会長

橋本 修 (青山学院大学)



この度、中野義昭前会長を引き継ぎまして、エレクトロニクスソサイエティ会長を拝命致しました橋本修です。エレクトロニクスソサイエティ (エレソ) の更なる活動活性化に向けて全力で努力させて頂きたいと思ひます。

私は皆さまのご協力を得まして、この1年間本ソサイエティの次期会長として勤めさせて頂きました。振り返りますと、本ソサイエティではマイクロ波研究専門委員会において、幹事、副委員長、委員長、エレクトロニクスシミュレーション研究専門委員会において委員長、また APMC 国内委員会の委員長などを仰せつかり、活性化のために微力ながら活動の機会を頂きました。一方、自身を振り返りますと、学会、本ソサイエティは、学生時代から今日に至るまで、学会活動、大会、研究会等を通じて研究面では色々な議論やアドバイスを頂く場であり、また、企業、大学関係者を含めて色々な方と知り合える場でありました。大変に有り難く思っており、今日まで本学会、本ソサイエティに育てて頂いたという深い思いを抱いております。

さて、本ソサイエティの副会長としての1年間、エレソのあり方 WG や執行委員会の中で、さまざまな議論に関わってきました。主に、論文誌の改革、ソサイエティの魅力

の増強、研専のあり方、ソサイエティ大会の応用物理学会との併催などです。この中で、論文誌の改革では、収益力の向上、会員周知の方向性や編集出版会議の多くの取り組みが進もうとしている状況です。ソサイエティの魅力の増強に関しては、省庁・産業界を巻き込む施策、グローバル化の状況であり、研専のあり方も、本部においても改革への議論が進められているという状況を踏まえ検討を進める状況にあります。また、エレソのソサイエティ大会と応用物理学会の秋季講演会の併催の可能性についても検討が行われ、学会の活性化に繋がるかどうかなど、研専において議論を継続しています。さらに、財政状況にして予算時の見積もりと実際の相違が想像以上に大きかったことについての主要因の分析・議論なども活発に行われました。

その中でも、新しいエレソの組織・体制に関する議論が大きく前進しています。周知のように本ソサイエティがカバーしている範囲は、有機、超電導、マイクロ波、電磁界、光、量子、機構、記録、表示、材料、集積回路、シミュレーション技術など極めて広範で、しかも幾つかの魅力的な萌芽的分野を視野に入れていきます。このため、かねてより論文表彰などにおいて便宜的にエレソ内を3領域に分け

研究専門委員会(常設)(15)	
機構デバイス(EMD)	マイクロ波(MW)
磁気記録・情報ストレージ(MRIS)	集積回路(ICD)
超伝導エレクトロニクス(SCE)	有機エレクトロニクス(OME)
電子ディスプレイ(EID)	光エレクトロニクス(OPE)
電子デバイス(ED)	レーザ・量子エレクトロニクス(LOE)
電子部品・材料(CPM)	エレクトロニクスシミュレーション(EST)
電磁界理論(EMT)	マイクロ波・ミリ波フォトニクス(MWP)
シリコン材料・デバイス(SDM)	

時限研究専門委員会(7)	
集積光デバイスと応用技術時限(IPDA)	システムナノ技術時限(SNT)
超高速光エレクトロニクス時限(UFO)	ポリマー光回路時限(POC)
量子情報技術時限(QIT)	シリコンフォトニクス時限(SIPH)
テラヘルツ応用システム時限(THz)	

電磁波技術領域委員会(仮称)	
電磁界理論(EMT)	エレクトロニクスシミュレーション(EST)
マイクロ波(MW)	テラヘルツ応用システム時限(THz)

フォトニクス技術領域委員会(仮称)	
マイクロ波・ミリ波フォトニクス(MWP)	レーザ・量子エレクトロニクス(LOE)
光エレクトロニクス(OPE)	集積光デバイスと応用技術時限(IPDA)
ポリマー光回路時限(POC)	超高速光エレクトロニクス時限(UFO)
シリコンフォトニクス時限(SIPH)	システムナノ技術時限(SNT)

回路デバイス技術領域委員会(仮称)	
電子部品・材料(CPM)	電子デバイス(ED)
電子ディスプレイ(EID)	機構デバイス(EMD)
集積回路(ICD)	磁気記録・情報ストレージ(MRIS)
有機エレクトロニクス(OME)	超伝導エレクトロニクス(SCE)
シリコン材料・デバイス(SDM)	量子情報技術時限(QIT)

(a)現在の研専と時限研

(b)新しい3領域構成(案)

図1 領域構成

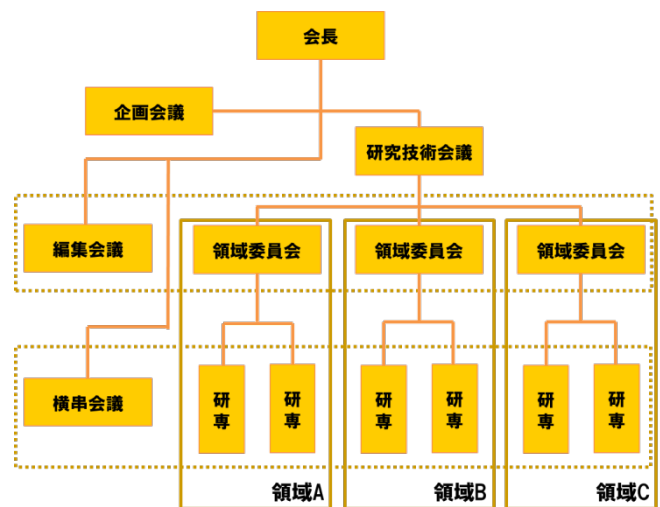


図2 組織形態 (案)

て領域ごとに審査する形式をとっています。新しいエレスの組織・体制では、この領域設定と区割りと会議体について、学会での発表数や実態を鑑み、新3領域に属す研専と新会議体の見直し案を作成し、この領域を組織形態としてまとめる方針で議論しました。この件に対し、研究技術会議を通して各研専からの意見を集約しましたが、おおむね方針には賛成という結果が得られました。これら3領域案は、図1に示すように、本ソサイエティの15の研究専門委員会と7の時限研究専門委員会を従前からの3領域ではなく、時代に即応した領域としています。また、これらの領域に領域委員会を設置し、新しい会議体の設置を検討しました。図2にその組織形態案を示します。これから組織形態により、現在の技術会議、企画会議、編集会議に領域会議や横串会議を加え、より敏速で効果的なソサイエティ運営が可能となると思っています。また、表1に会議の主な構成メンバーや業務などを示します。

以上、冒頭述べましたように、色々な面で私個人を育てて頂きました学会、本ソサイエティに対して、会長としての1年は、大変に短い期間であり出来ることはそれほど多くはありません。橋本としては、上記致しました新しい組織・体制として新3領域とその会議体の立ち上げを目指して努力をしたいと考えております。これから、エレクトロニクスソサイエティ会長として、皆様の御協力、御支援を宜しくお願い致します。

著者略歴：

昭和51年電通大・電気通信・応用電子工卒。昭和53年同大大学院修士課程了。同年(株)東芝入社。昭和56年防衛庁入庁。昭和61年東工大大学院博士課程了。平成3年青学大助教授。平成6～7年イリノイ大客員研究員。平成9年青学大教授。平成24年～現在青山学院大学理工学部部長。工博。環境電磁工学、生体電磁工学、マイクロ波・ミリ波計測に関する研究に従事。平成2年防衛論文賞、平成15年エレクトロニクス実装学会論文賞、平成18年第9回エレクトロニクスソサイエティ賞、平成26年通信ソサイエティ Best Paper Award 等各受賞。主な著書に、「FDTD時間領域差分法入門」(1996)、「電波吸収体のはなし」(2001)、「高周波領域における材料定数測定法」(2003)、「電波吸収体の技術と応用」(2003)、「実践FDTD時間領域差分法」(2006)等。電子情報通信学会(フェロー)、電気学会(フェロー)、エレクトロニクス実装学会、日本建築学会、IEEE各会員等。

表1 会議体の構成や業務(案)

全体構成	複数の研専からなる研究領域を新設。領域委員を選ぶ。領域委員は領域全体を俯瞰する役割。各会議体から横串機能を取り出しまとめた横串会議を新設。研専同士の新陳代謝を促進 編集会議は領域委員をもメンバーとした横串化。効率的な出版活動ができる体制に
企画会議	長期戦略、財務、広報、グローバル戦略・企画立案、他ソサイエティとの連携調整など
研究技術会議	領域委員と副会長で構成 技術渉外(契約など)、大会運営、など技術会議内の共通業務を担当
編集会議	副会長、領域委員、和文誌・英文誌・ELEXの編集委員長、各領域委員 出版関係業務をになう 出版物の在り方を議論 ・領域ごとに分けた出版 ・領域連携の出版 ・和文・英文誌のエディタの統一
領域委員会(新設)	所属研専委員長と領域委員から構成 研専の枠を超えた活性化施策(研究会、セミナー、表彰)の企画検討と実行 領域委員は編集会議と協力して編集企画を立案
横串会議(新設)	副会長、領域委員、研専委員長で構成 領域・研専を横串で行う活動を議論 イベント開催：領域横断的な国際会議、第2種研究会の企画、支部との協力 研専の新陳代謝を討議：研専の所属領域見直し、統廃合、新領域取り込み戦略(第3種研)